

2023年1月8日 礼拝説教要旨

詩編講解説教133 「一つにする礼拝」

詩編133：1～3、使徒言行録2：43～47

聖書に登場してくる兄弟の仲はあまりよくありません。神さまが人間をお造りになられた時「人が独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」（創世記2：18）と言われてアダムにエバを与えられました。それは人間が独りではなく他者と共に生きる存在として造られたということを意味しています。ところが人間は神さまとの約束を破り共に生きることができなくなりました。罪が支配し神さまと共に生きられなくなった人間は、隣人も共に生きることができなくなりました。聖書はそういう共に生きられなくなった人間の罪を見つめています。

すでにその息子たちカインとアベルの話がそれを象徴しています。それは兄弟殺しの話です。兄が弟を妬み殺してしまうのです。また同じ創世記にはエサウとヤコブの話があります。イサクの双子の息子たちですが、生まれてくるときから先を争って生まれてきて弟が兄のかかをとを掴んでいたという面白い話があります。そして長子であるエサウが受け取る祝福を弟ヤコブが奪い取ったことで兄弟の確執がいよいよ鮮明になりました。他にも聖書ではヨセフ物語やダビデの息子たちによる王位継承争いが描かれます。同じ同胞、「兄弟」であるはずのイスラエルの部族同士の分裂、抗争の歴史が繰り返されていきました。

新約聖書では放蕩息子のたとえ話があります。そこには兄弟が登場して来ます。弟が放蕩息子で家を出ていきますが、兄は真面目に父親の元で働いています。弟が帰ってきたとき父親は喜んで迎え入れますが、兄はそのことを受け入れることができませんでした。実はこの物語の本当の放蕩息子はこの兄の方だと捉えることもできます。兄は父親に対しても弟に対しても不満があります。放蕩三昧の弟が許せないし、その弟を受け入れた父親が許せない。共に生きることができない人間の孤独が描かれています。わたしたちもそうでしょうか。兄弟ゆえに分かり合えないことがあります。他人だったらどんなに気が楽か。近しいゆえに、近しいからこそ対立する。聖書はこういうわたしたちの人間関係をよく知っています。こじれた家族が、兄弟が元に戻るものがどれほど困難であるか。家族の難しさ、共に生きることの難しさ。それはわたしたちもよくわかっていることではないでしょうか。

それゆえに「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」この喜びの背景には、単に仲睦まじい兄弟の姿があるのではなく、むしろ逆で、関係が壊れていた、その兄弟が共に座っているところにこの驚きと喜びがあると考えるとよいのです。そういう交わりの回復の歌、家族の再建の歌がこの133編です。では何が兄弟を結びつけているのでしょうか。それは礼拝です。礼拝がわたしたちのこじれた関係をほぐし、つなぎとめていくのです。確かに家族が一つになることは難しいでしょう。けれどもそれは神さまの御前に立つことで可能になるという約束です。ですから、もう一度、立ち止まって考えていただきたい。わたしたちが悩む家族の問題、そこに神さまがおられるか。神さま抜きで解決しようとしていないか。人間の力で修復できると考えていないか。

「かぐわしい油が頭に注がれ、ひげに滴り、衣の裾に垂れるアロンのひげに滴り、ヘルモンにおく露のようにシオンの山々に滴り落ちる」（2～3節）この「油」というのは、祭儀の時に、特に大祭司の任職の時にふりそそがれたと言われます。それは神さまからの祝福のしるしです。

「ひげに滴り」と繰り返されますが、服にも滴り落ちるほどに惜しみなく大量の油が注がれた。それが意味するのは、天来の祝福、神さまの恵みがいかに豊かであるかということです。3節の「ヘルモンにおく露」というのは、ヘルモン山の雪解けの水がヨルダン川の水源となりますが、この「露」がやがてパレスチナの荒涼とした大地を潤す源になるのです。これも天来の恵みの豊かさを示すものでしょう。つまり人間の力ではなく、神さまの恵み、憐れみによってこそ、わたしたちの問題は修復可能だということです。

そしてこの惜しみない祝福の注ぎこそ、イエス・キリストの到来を表していることは言うまでもありません。原文ではこの3節ほどの短い箇所の中に「下る」という意味の言葉が3回繰り返されます。キリストの到来はまさに神さまの祝福が天から下り、注がれ、滴り落ちた出来事です。それは惜しみなく注がれる油のように、わたしたちに注がれました。最後はその命も全部注ぎ尽くされました。わたしたちが共に生きることができるようするためにキリストは十字架で罪を贖い、よみがえりによって新しい命を与えてくださいました。この神さまの祝福に満たされる時に、わたしたちの関係も祝福されたものと整えられていくことを信じましょう。